

昭和42年11月14日 第四種郵便物認可
昭和55年6月20日発行(毎月1回20日発行)
物 性 研 究 第34卷 第3号

vol. 34 no. 3

物性研究

1980/6

1. 本誌は、物性物理の研究を共同で促進するため、研究者がその研究意見を自由に発表し討論しあい、また、研究に関連した情報を速やかに交換しあうことを目的として、毎月1回編集・刊行されます。掲載内容は、研究論文、研究会・国際会議などの報告、講義ノート、研究に関連した諸問題についての意見、プレプリント案内、ニュースなどです。
2. 本誌に掲載される論文については、原則として審査を行いません。但し、編集者が本誌に掲載することを著しく不相当と認めたものについては、改訂を求め、または掲載を拒絶することがあります。
3. 本誌の掲載論文を他の学術雑誌に引用するときは、著者の承諾を得た上で **private communication** 扱いにして下さい。

投稿規定

1. 原稿は400字詰原稿用紙を使用し、雑誌のページ数を節約するために極力簡潔にお書き下さい。
2. 原稿は2部（オリジナル原稿及びコピー）提出して下さい。
3. 数式、記号の書き方は Progress, Journal の投稿規定に準じ、ミスプリントが生じないように処置をとって下さい。上ツキ、下ツキ、英字の大、花文字、ギリシャ文字、oとaと0(ゼロ)、uとnとr、cとe、l(エル)と1(イチ)、xと×(カケル)、uとv等を赤で指定して下さい。
4. 数式は3行にわたって大きく書いて下さい。
5. 1行以内におさまらない可能性のある長い数式等は必ず改行の際の切れ目を赤で指定して下さい。
6. 図はそのまま印刷できるものを原稿に添えて下さい。図の縮尺、拡大は致しません。1頁(13×19cm²)以内に入らない図、そのまま印刷できない図は原則として著者に返送し、書き改めていただきます。図、表の説明は別紙に書き、本文中に挿入位置を赤で明示して下さい。
7. 投稿後の原稿の訂正はできるだけさけるようにして下さい。
8. **別刷は原則として作りません。**どうしても別刷が入用な場合は、投稿の際に所要部数を50部単位で申込んで下さい。別刷代は下記方式により、**現金で納入**していただきます。

(郵券による受付はいたしません)

p : 物研出来上り頁数

x : 別刷所要部数

a : 別刷1頁の代金 3円

b : 製本代(別刷1部につき) 30円

別刷代 = (ap + b) x + 送料

別刷代金は別刷を受取ってから、1ヶ月以内に納めて下さい。それより遅れた場合には遅滞追徴金を請求されることがありますから、御注意下さい。

9. 原稿締切日は毎月10日で原則として次月発行誌に掲載されます。

第11期第3回物性小委員会議事録

日 時 1980年3月19日 10:55~17:10

場 所 東京大学物性研究所旧棟ロビー

出席者 伊達宗行, 佐々木亘, 金森順次郎, 白鳥紀一, 畑徹, 近桂一郎, 勝木渥, 長岡洋介,
横田伊佐秋, 長谷田泰一郎, 禅素英, 達崎達, 中山正敏

報告事項

1. 物研連報告(伊達)

学術会議よりの国際会議への派遣については、「液体金属」に強い要望もあったが、A項優先の建前から、物性関係では、1位はカテゴリーAの統計力学(エドモントン), 以下カテゴリーB, Cの液体金属(グルノーブル), 真空紫外分光(シャーロットビル)を推した。小野周委員不在のため情報不足で、結論は久保委員長一任となった。

IUPAPの vice president 今井功氏の話によると、中国-台湾問題の解決が図られている。化学は、台湾を便法を以て参加させようとするいわゆるオリンピック方式を取った。

原子核・素粒子関係からは、高エネルギー研のトリスタン計画, フォトン・ファクトリーとか日米共同研究とか、活発な動きがある。

久保委員長より、科研費のあり方を再検討して欲しい、との要望があった。

横田: OD問題に関連して、20年後の大学教官の年齢分布予想が紹介され、印象的であった。

60才附近と35才附近に2つの山があり、中堅が欠けるというものである。

長谷田: 研究者の社会的需要を調査してはどうか。物理学会でも話が出た。

横田: 企業だけでなく、国公立研究機関も含めて、研究者と意見交換の機会を持つのはどうか。

新潟大で総合大学院構想とからんで博士課程に何を望むか、というアンケートを取った。

博士は柔軟性・適応性に欠けるという意見がある。

禅: 文部省は学術博士を作るよう示唆している。

長谷田: 「液体金属の要望が強かった」という根拠は何か。

伊達: 物小委委員に出したアンケートの結果である。ただ、学術会議はIUPAPの Commission 関係(カテゴリーA)を優先する。

2. 各種選挙について(伊達)

第11期第3回物性小委員会議事録

物小委による物性研人事選考協議会委員の選挙が先日郵送投票で行なわれ、開票の結果、真隅泰三、伊達宗行、長岡洋介、金森順次郎、中野藤生の5名を推薦した。全員再任である。規則は変えない迄も、固定化を防ぐ方法を考えたい。

長谷田：物理学会の各賞推薦委員の場合、過去のデータを付けるが、これが再任を助長する面もあり現在検討中である。あまり固定化しない方が良いのは確かである。

禅：つい同じ人を選ぶということもある。データはあった方が良い。

佐々木：現状で弊害が無ければ再任でも良いではないか。

長岡：以前のように、できるだけ委員会の席上で投票してはどうか。

伊達：各種選挙は年末にある。11月頃定例委員会を開き、用意しておくのも一案である。今回このような議論があった事を記録に留め、次の選挙に際してもその事に注意を促して、投票してもらうことにする。

3. 会計略式報告(近)

正式報告は、6月末で決算の上したい。大略は、前年よりの繰越金18万円、収入42万円、今回物小委開催費用20万円、次年度繰越金40万円である。。

伊達：物性研に対し援助を求める働きかけはしなかった。物性グループからの援助についてはグループ員からの反応は無かったと斉藤事務局長から聞いている。今年度は必要が無かったので要請しなかった。

4. 理論国際交流センター(金森)

基研研究部員会議議長団の三輪浩氏の依頼もある。「(原子核・素粒子)理論国際交流センター(案)」(別紙資料)という提案が、核研連でまとまりつつある。研究者の招聘・派遣、そのための客員部員と事務部よりなる組織の設置が主内容である。物性でも討議してもらいたい。

佐々木：物性実験があまり視野に入っていない。物性も独自に考えてはどうか。

金森：若い研究者が行けるchannelを作りたい。日本の仕事のPRにもなる。

伊達：共産圏の国では、研究機関は科学アカデミー(中国では科学院)と教育省の2系列がある。日本側は、前者とは学術振興会、後者とは文部省という窓口の整理がなされたようだ。

審議事項

1. 科研費のあり方について

(提案趣旨：横田) 物研連久保委員長より、10年経過した現行制度の再検討が提起された。

- a 現在のカテゴリー(特別, 特定, 総合A B, 一般A B C D, 奨励, 試験)の妥当性。
- b 特定研究と総合研究との中間の規模〔1~2億円, 20~30人〕の計画を組織したい。広く物性を覆わなくても良いのではないか。
- c 物小委の提案に対する関わり方。物性研究者に対する調査をしてはどうか。

伊達：学術会議の研究費委員会の調査がすでに始まっている。内容は

- a カテゴリーが細かすぎないか。
- b 補助金以外に NSF 的な科学研究基金についてどう考えるか。
- c その他

金森：予算の使い方にも問題がある。次年度繰越ができるとうまい。

伊達：現在は3年計画でも1年毎に使い切らないといけない。使える時期も早めて欲しい。

近：私立大学では大学が立替払いする場合もある。

伊達：総合研究はB(旅費のみ)に統一せよという声もある。

横田：総合A(旅費+校費)を小型特定研究のように活用できないか。

白鳥：活用できないとすれば、額の問題か、審査の問題か。後者ならば議論して行くことで多少解決の可能性もあろう。

長谷田：大分前に、 O^{17} について試みたようなことは、これからも考えるに値すると思う。

金森：理論では、現在の総合Aも計算費として有効である。

近：現状では、小大学連合で総合Aを出すよりも、各自が一般を出す方が有効だ。

伊達：科学研究基金については、人件費や海外出張費に使う等の外に、科研費と異なる自由度としてどんなことが考えられるか？

佐々木：現在は科研費の審査費用も出ない、という問題もある。NSFは独自の機構・スタッフを持っており、常時申請を受付けている。基金になれば、単年度予算方式の制約から自由になれるかも知れない。文部省助成課でも、今の審査方式に行き詰まりを感じているようである。特定研究の学術会議内の審査担当者は、各部から1名しかいない。今回も「乱れた系の物性」(4部)と「アモルファス物質」(5部)とが競合したが、後者は5部から1位で推されて来たのに対し4部は順位をつけないというようなことも影響があったと聞いている。ただ、特定研究については、2, 3年前迄の計画研究重視の方針は一変し、公募研究を重視するようになった。これには学術審議会の強い要望もあったという。総合Aの活用も、何回かやってみなくてはいけない。

伊達：総合Aでは300~600万円ということになっているのではないか。特定研究を数多く申

請しているのは化学で、常に3つぐらい用意し、戦術を操っている。

佐々木：物性関係でも小規模特定をいろいろ出してはどうか。小さいから悪いこともなからう。

白鳥：「半金属」は駄目だった。

伊達：テーマが狭過ぎる、という理由だった。

横田：「半金属」級のものが多数ある。それらが小型特定研究として採用されれば、いろいろおって行くであろう。

2. 基研将来計画

(提案趣旨：長岡) 基研では将来計画を作り、昨年5月「基研の将来」というパンフレットを作った。昭和55年度は「統計物理」部門が新設され、久保亮五氏の教授就任が決った。ただし、実増員は教授1のみで、助教授は物性論助手の振替である。また、7年間という期限つきである。計画としては、固有部門として「宇宙物理基礎論」と「非線形物理学」、客員部門が国内2、外国人2、国際交流の充実がある。

「統計物理」の発足により、素粒子と物性の部門が2:2になったのを契機として、「基研は素粒子の研究所ではなかったのか」という声も出た。大学設置法には「素粒子その他……」とある。統計物理は物性に限らず物理の基礎だと思ふ。最近提案される研究計画には、統計物理的なものが多いが、そうでないものも出して全体に関心を高めて欲しい。

国際交流については、お客さんでなく、スタッフ的な人が欲しい。基研は研究所であるから窓口的な「交流センター」とは異なる面が出せる。

伊達：「素粒子・核交流センター」と基研の交流計画とはどういう関係にあるのか？

中山：「交流センター」構想のうち、基研で実現できるのはどの辺迄か？

長岡：つめて考えてはいない。

金森：物性からも声が上れば、交流センターは勧告になろう。一般性ができれば、場は基研と
いうことになろう。

金森：基研は素粒子に関しても中心ではなくなっているのではないか。物性はスタッフの数も少ない。研究部員の出席率も悪く、不熱心になってきている。

佐々木：研究部員名簿を若い理論家に見せたところ、もっと説得力のある人にならないか、という感想があった。選挙母体を考え直してはどうか。

長岡：素粒子は素粒子論グループが母体となっている。物性は漠然としている。

金森：物性理論グループが必要だろうか？

勝木：以前、宮原将平、飯田修一氏などが研究部員になっていた時代もあった。好ましいと思

う。理論に限定する必要はない。

中山：基研は、物性理論全般というよりは、物性と基礎物理学の交叉するところや新領域の開発の中心となって行くべきである。

勝木：佐々木氏が聞かれた感想に関して。最近、地方大学から基研研究部員を出す選挙運動をやって来ている。その候補者が最高点になっている。これは基研を地方大学の人に familiar するためにやっている。

伊達：地方大学の人達に feed back する努力をしているか？

勝木：「地方大学懇談会ニュース」などで情報を流している。物性研共同利用施設専門委員についても同様のことをしており、地方大学の物性研利用者は増えている。

金森：むしろ有名な人が研究部員会に出て来ないことが多い。

中山：研究部員の選挙方法を変える必要があるか。統計物理は物性よりはもっと広い分野と関わっているが。

伊達：見直しをしたい。

金森：物性基礎論・統計力学の世話人に相談してはどうか。

中山：Informal Meeting を開いてもらおうとよい。現在は科研費の連絡の会合だけである。

勝木：基研の中間子論史料室の現状を聞きたい。

長岡：湯川資料の整理・保存が当面の目標で、その先はこれからの問題である。

勝木：自分で研究してみて、物性研究者は自分達の歴史を知らなさ過ぎると思う。歴史的な整理が必要ではないか、と思っている。基研に資料室ができ、そこで研究もできるようになればと思っている。

金森：科学史研究を始めるか、という所迄議論は行っていない。物性を含めるかどうかも分らない。

長岡：湯川記念館史料室構想も所内で進めて来たが研究部員会議で議論した事がないのが実情である。

長谷田：基研の目的は「素粒子その他の…」で良いのか。

長岡：素粒子は基礎から外れないであろう。統計物理といえども究極は素粒子に係わるべきではないか？ しかし、はっきりとした区分をしない方が良い。物性研でやっているようなものも基研でやってよい。私自身も、最近、MOSの実験がランダムな2次元系の理論、さらには場の理論と関連しあっているという体験をした。

中山：物性研の研究会と基研の研究会では、同じようなテーマでも明らかに気分の違いがある。この違いを大切にしたい。

横田：基礎物理学と結びつける，という感覚がないといけない。

長岡：今秋，基研で「統計物理学の課題」という大きなシンポジウムを開く。

伊達：分子研と物性研との将来における関係も，別の機会に考えた方がよい。

3. 物小委開催経費について

(提案趣旨：中山) 物小委の開催経費について考え直すべき時期に来ている。物小委は，学術会議の下部機構であると共に，物性グループの代議機関でもある。学術会議から経費が出ない以上，研究者で負担すべきではないか。学会の折毎に開く他に，年1回は開けるようにしたい。この経費(約40万円)を，物性グループと小委員で折半して負担してはどうか。委員1人当たり，年間1万円となる。物性グループの財政事情はどうか？

近：大雑把には，54年度は繰越金51万円，収入36万円——これは5人当たり千円で集金に努力した。事務局報を3回発行して23万円の支出，といったところである。なお，これは名簿を発行しない収支ともに平年度である。

伊達：出張依頼により，科研費で出張することは可能である。

長岡：核研連は核研等の共同利用予算を使っている。物性研はどうだろうか。

伊達：特定の研究所に依存することはどうだろうか。

長谷田：共同利用研究所の機能の一つと考えられないか。物性一般の将来計画のために物性研が金を出してもいいではないか？

近：共同利用研究所だから即物小委を支援する，ということにはならない。また，共同利用のための予算が窮屈な現状もある。

伊達：「物性研のあり方」について議論する会を開くことを提案してはどうか。物性研将来計画の5本柱の議論をする。これを正規の研究会として提案したい。

横田：フォトン・ファクトリーなども一緒に議論したい。

禅：共同利用について外側の意見も聞いてもらいたい。

白鳥：Oakridgeに一つ共同孔を作るという計画の話聞いた。日米両国の首脳レベルから出発した，ということだ。

伊達：少なくとも物小委全員が参加する研究会を，9月の共同利用施設専門委に委員長と幹事で提案したい。物性研の現状と将来計画を中心にする。昨年4月の物小委で話題となったtechnicalな面の検討もある程度含めたい。

佐々木：阪大強磁場の共同利用はどうなったか？

伊達：4月から学部付属実験施設となったが，共同利用費がつけられなかった。53，54年度

は科研費があった。その利用者が総合Aを組織して申請している。

伊達：中山提案の精神は大切だが、今すぐ実行しなくても良いと思う。

勝木：物性グループの初期の頃はカンパでまかなって来た。委員が自腹を切るところから出発して、物性グループのメンバーが積極的にカンパしようというような状態になれば、物性グループの見直しの機会になるかも知れない。

中山：やるなら次の選挙前に決めねばならない。

伊達：委員会の他に、事務経費が年間7～8万円かかる。特に百人委員による投票の経費が大きい。

近：百人委員を母体とした選挙は、物性グループ事務局でやってもらいたい。

白鳥：少なくとも、選挙費用は物性グループに出してもらわなければならない。

伊達：事務局長と相談する。

4. 物小委の役目

（提案趣旨：佐々木）物小委の仕事を考えてみると、諸種選挙、学術会議費用による国際会議派遣者の人選の2つははっきりしている。その他は、サロンのように議論しているが、物性研設立に匹敵するような働きはその後ない。高エネルギー、原子核、生物では、研究環境向上のためにそれぞれ活発に提言・立案がなされている。物性グループの中にも、もっと積極的にそのような機能をする場があっても良いのではないかと。物小委の使命についてもアイデアを出して物性グループに feed backして意見を求めることが必要な時期ではないか。

横田：他分野では、学協会が政策立案機能を持っている。物理学会は、一切そういうことをしない。物小委がその役割を果さざるを得ない。物小委は民主的だけど弱点もある。

佐々木：原子核はお金がかかるから必然的に組織ができる。

伊達：物性グループは損をしている。外部から見ると、陰気であると言われている。物性研の5本柱の議論もまともにしなかった。もっとフランクに内部論争をすべきである。

横田：積極性に欠ける。科研費にしても、物小委で支持するか否かもまだはっきりしていない。研究者の自主性を尊重するのは良いが、他分野との競争には弱い。

畑：研究が個人プレイから、プロジェクト型か共同利用型になって来ている。2つのバランスが良くない。どちらで行くべきか、若い人の間に不安感がある。物性にこだわる、という志向がなくなって来ている。

白鳥：物理にしがみつすぎる、という批判も外からある。

5. 物性将来計画

(提案趣旨：伊達) 物性研究施設構想を討議する会を開いたが、文部省の状況から佐々木提案を原型で通すのは困難である、ということになった。本日は「物性材料開発計画」を私案として提案したい。資料を配布するが、これは物性研究の方向として(1)極限的手法の開発と応用とともに、(2)新物質群の開発および既知物質の精密化を考え、前者が物性研等で緒についたのと相補的に後者に重点を置くものである。当面の方針としては、物性材料開発に意欲的な研究グループをまとめて研究班を作る。要点は次の5つ。(a)特定研究も含めた現実的な案、(b)試料製作一本に絞る、(c)研究グループ指定には研究アセスメントを取る、(d)完成試料における製作者優先権と同時に、多角的測定を共同研究として推進、(e)研究成果の高い所の施設化・センター化の推進。以上の案を示して、アンケートを取りたい。

金森：佐々木提案はどうなったのか。

伊達：しばらく棚上げだ。できるものは各大学概算要求等で進めてもらう。今度の構想とは、(e)で関連する。

佐々木：久保氏の話では、(イ)新規人員増が困難、(ロ)物性だけのものとは考えられない、の2つの難関がある。

長谷田：佐々木提案を主張しつつけるのかどうか検討しなくてはならない。一つの理想案として引込めるべきでは無いと思う。

中山：昨年4月の物小委では、佐々木提案の具体化を図る作業グループを作る事が決ったが、その作業はどこ迄進んだのか？

伊達：報告が遅れていたが、佐々木氏によるメモをお返しする。後日写しを配布する。

佐々木：具体的提案が続出する事を期待していたが、実現の見通しが無い故か、あまり出て来なかった。これも前途困難と判断した一つの材料である。

長谷田：「かたち」が分からないので、戸惑っていたのではないか。

金森：理論でも、大規模計算、例えばアメリカでは16のCPUを並べたシステムが考えられているが、そのような計算のセンターなどありうる。が、まだ考慮中で具体化には時間がかかる。そのような構想を奨励するためにも、佐々木提案は引込めるべきではない。

長谷田：ユニークな新物質群の開発というのは大いに賛成であるが、経費をかけなければできないがまた経費をかければできるというものでもない事を認識する必要がある。

伊達：そういうものを拾い上げたい。アモルファス、インタカレーション、MX_n、超イオン伝導体など、日本全体で50ぐらいの拠点があるのではないか。

長谷田：評価が難しい。物性研の物質探索作業が3年程前行なわれた。「ない」ものをと考え

て始めたが、「ある」方に支持が行きやすい。

横田：混合原子価，超イオン伝導など，皆化学屋はとっくの昔から知っていた。新物質でなくとも面白いものはある。

長谷田：面白そうなものを物理学者のために合成して貰えるかどうかの問題だ。

伊達：会社から貰って来た Si や Ge で半導体物理が発展して来たが，そのような方向だけではいけない。材料の問題を採上げる姿勢を示せば，いろいろ提案があるだろう。逆説的な言い方だが，ボスがかなりやっているもの，例えば cheverel 型超伝導化合物などは，もう推進しなくても独りで動いて行くだろう。

禅：横浜国大でも佐々木提案について討議した。現状では共同利用をやり易くする方が先決という意見もあって，提案は見送ったが関心はある。

勝木：物性グループの歴史も含めて物性の歴史をきちんと研究して行く，そのための資料室のようなものを考えていた。他の提案がもう少し増えたら出そうと考えていた。

佐々木：大げさでなければ，特別推進研究費を利用することも考えられる。

横田：これは人件費に使えるのか？

佐々木：使えると聞いている。

中山：特別推進研究費は，どういう風に運営されているのか？

佐々木：科研費ではない。文部省の各大学への補助金である。レーザーグループの人の話だと特定研究代表者への諮問の結果，今年はレーザーということになったそうだ。

長谷田：できる，できないという議論と，理想はこうだという議論とは次元が異なる。

禅：少資源国日本の行く途を考えて，up to date な事をやらなくてはならない。

横田：日本経済は重化学工業中心からの転換期にある。頭脳集約的な物質の高度利用という大義名分がつけられる。

伊達：佐々木提案は大義名分としては意義があることを再確認したい。「物性材料開発計画」は，佐々木提案作業グループの検討を経た上でアンケートを取りたい。

雑件

1. 中食時に，勝木委員の提起により，教養部教官の大学院担当に関する手続上の問題について情報を交換した。阪大では，全員授業担当，教授は研究科委員。新潟大では全員授業担当。しかし，研究科委員ではない。手続としては，担当理由書をつけて上申し，授業計画を作る。横浜国大の事務の話でも，担当させるか否かは研究科委員会の意向が先行し，事務側の問題ではない。

第11期第3回物性小委員会議事録

2. 1980年中に、次期物性グループ事務局を決定しなければならない。
3. 新事務局により、1981年春から次期百人委員の選挙を行なわねばならない。
4. 10月の分科会(福井大)の際に事務的な問題を中心に物小委を開く。11月頃、物性研究会に引続き物小委を開く。

掲 示 板

基研シンポジウム「統計物理学の課題」

参 加 者 公 募

基礎物理学研究所では、今年4月「統計物理学」部門が新設されました。これを機会に、統計物理学の現状と今後の課題について集中的に討論を行うため、下記のようにシンポジウムを開催いたします。統計物理学は、相転移・非平衡系・不規則系等の研究において、数年来目覚ましい発展を遂げつつあります。また一方においては、それが狭い意味での物性物理学のみでなく、素粒子論から生物学に亘る他分野とも深い関連を持つものであることが、最近とくに明らかになりつつあると思います。シンポジウムは、下記講師の方々の報告を中心に討論する形式で行いますが、多くの方の積極的な参加を期待いたします。物性分野以外の方もご参加下さい。

なお、予算の都合上、参加者への旅費支給は十分に行えない場合がありますので、予めご了承下さい。

記

日 時：11月13日(木)～15日(土)の3日間

場 所：基礎物理学研究所

講 師(予定)：[相転移]鈴木増雄(東大理)，太田隆夫(九大理)

[非線型・非平衡]森 肇(九大理)，川崎恭治(九大理)

蔵本由紀(京大理)

[不規則系]松原武生(京大理)，米沢富美子(基研)

[素粒子]岩崎洋一(筑波大物理系)

[原子核]滝川 昇(東北大理)

[宇宙]杉本大一郎(東大教養)

[生物学]松田博嗣(九大理)

申込〆切：10月13日(月) 必着

申込先：京都市左京区北白川追分町

京都大学基礎物理学研究所 長岡洋介

(シンポジウム世話人：川崎恭治, 鈴木増雄, 長岡洋介, 松原武生, 森 肇)

編 集 後 記

4月から基研に久保先生が着任された。たった一人増えただけでこんなにもいろいろのことが変わって来るといのは発見である。何かしら全体の空気がひきしまったかんじがするなど、心情的な効果のほかに、明らかに目に見えた効果がある。基研の物性セミナーが断然繁盛するようになったのである。久保先生ほどになると、ただ坐っているだけでも放射線か何かを出しているのかな、と感心すると同時に、物性セミナーが急に活気づいたということは、これまでのスタッフの評価が端的に表われているのでは、と気がついて、複雑な心境である。(FY)

物 性 研 究

第 34 卷 第 3 号
1980年6月20日発行

発行人 長 岡 洋 介
京都市左京区北白川追分町
京 都 大 学 湯 川 記 念 館 内

印刷所 昭 和 堂 印 刷 所
京都市左京区百万辺交叉点上ル東側
TEL (075) 721-4541~3

発行所 物 性 研 究 刊 行 会
京都市左京区北白川追分町
京 都 大 学 湯 川 記 念 館 内

編 集 後 記

4月から基研に久保先生が着任された。たった一人増えただけでこんなにもいろいろのことが変わって来るといのは発見である。何かしら全体の空気がひきしまったかんじがするなど、心情的な効果のほかに、明らかに目に見えた効果がある。基研の物性セミナーが断然繁盛するようになったのである。久保先生ほどになると、ただ坐っているだけでも放射線か何かを出しているのかな、と感心すると同時に、物性セミナーが急に活気づいたということは、これまでのスタッフの評価が端的に表われているのでは、と気がついて、複雑な心境である。(FY)

物 性 研 究

第 34 卷 第 3 号
1980年6月20日発行

発行人 長 岡 洋 介
京都市左京区北白川追分町
京 都 大 学 湯 川 記 念 館 内

印刷所 昭 和 堂 印 刷 所
京都市左京区百万辺交叉点上ル東側
TEL (075) 721-4541~3

発行所 物 性 研 究 刊 行 会
京都市左京区北白川追分町
京 都 大 学 湯 川 記 念 館 内

講読規定

個人講読

1. 会費：当会の会費は前納制をとっています。したがって、3月末までになるべく1年間分会費を御支払い下さい。
なお新規講読お申込みの場合は下記の会費以外に入会金として、100円お支払い下さい。

1年間の会費

1st volume	2,340円
2nd volume	2,340円
	計 4,680円

(1年分まとめてお支払いが困難の向きは1 volume 分ずつでも結構です)

2. 支払いの際の注意：なるべく振替用紙を御利用の上御納入下さい。
(振替貯金口座 京都5312)
なお通信欄に送金内容を必ず明記して下さい。
雑誌購読者以外の代理人が購読料を送金される場合、必ず購読者本人の名前を明記して下さい。
3. 誌代の支払遅滞の場合：当会の原則としては、正当な理由なく2 Vols.以上の誌代を滞納された場合には、送本を停止することになっていきますので御留意下さい。
4. 一括送本を受ける場合：個人購読中に大学等で一括配布を受ける様になった場合は、必ず「個人購読中止、一括配布希望」の通知をして下さい。逆の場合も同様です。
5. 送本先変更の場合：住所、勤務先の変更等送本先が変わった場合は、必ず送本先変更届を提出して下さい。

学校、研究所等機関購読

1. 会費：学校・研究所等での購読及び個人であっても公費払いのときは機関会員とみなし、代金は、1冊 730円、1 Vol. 4,380円、年間 8,760円です。この場合、入会金は不用です。学校、研究所の会費の支払いは後払いでも結構です。しかし購読申込みをされる時に支払いに必要な請求、見積、納品書各何通必要なのかをお知らせ下さい。
なお、当会の請求書類では支払いができない様でしたら、貴校、貴研究機関の請求書類を送付して下さい。
2. 送本中止の場合の連絡：発行途上にある volume の購読途中中止は認められません。購読中止される場合には、1ヶ月前ぐらいに中止時期を明記して「購読中止届」を送付して下さい。

雑誌未着の場合、発行日より6ヶ月以内に当会までご連絡下さい。

物 性 研 究 34-3 (6月号) 目 次

○地球大気におけるエントロピーバランス……………青木一郎…………	241
○講義ノート	
第4回 π 中間子凝縮(その2)……………G.Baym…………	245
○物性小委員会議事録(第11期 第3回)……………	269
○修士論文アブストラクト	
神戸大学電気・電子工学科……………	279
東京電機大学工学部物理教室……………	281
○ニュース……………	284
○掲示板	
基研シンポジウム「統計物理学の課題」参加者公募……………	285
○編集後記……………	286

物 性 研 究 34-3 (6月号) 目 次

○地球大気におけるエントロピーバランス.....青木一郎.....	241
○講義ノート	
第4回 π 中間子凝縮(その2).....G.Baym.....	245
○物性小委員会議事録(第11期 第3回).....	269
○修士論文アブストラクト	
神戸大学電気・電子工学科.....	279
東京電機大学工学部物理教室.....	281
○ニュース.....	284
○掲示板	
基研シンポジウム「統計物理学の課題」参加者公募.....	285
○編集後記.....	286